

Title	日本原始文化, 樋口清之著, アテネ文庫, 日本歴史シリーズ3
Sub Title	
Author	江坂, 輝彌(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.28, No.3/4 (1956. 3) ,p.156(434)- 166(444)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560300-0156">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560300-0156</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

述としては、此の程度の頁數では先づ出色のものであり、又最近世の事情の解明には最も適當したものであらう。又、卷頭に於いて著者の求めたポイントは大體に於いて云ひ盡されてゐると思はれる。全卷を通じ終始イギリスは控えに扱はれ、アジア、近東ソビエトに余分に頁が割かれてゐるのも最近の一つの傾向とも云ふべく、又恐らく此の形が最も最近の世界を描くのに適當した形ではあるまいか。著者の説明は史的であると共に又極めて論理的であり、此のため文章から受ける印象は明快であるが、反面稍理論めいたくどい箇所も散見される。歴史を書く場合、此れは當然出會ふ問題ではあるが、本書の場合、決して煩雜さを加えてゐる譯ではない。著者を導いてゐるものは強いて云えば理想主義とも云えるものであらうが、史家としての必要な實證性及び軟な感覺は決して失はれてゐるものではない。

(鈴木泰平)

## 日本原始文化 樋口清之著

アテネ文庫 日本歴史シリーズ3

昭和三〇年一〇月三〇日發行

文庫版七六頁の小冊子で、

序

第一章 日本文化の起源

一、人類文化の起源と日本國土の成立

二、日本における舊石器問題と無土器文化

三、最早期繩文式文化

第二章 日本の石器時代文化

一、繩文式文化の發展

二、繩文式文化の生活

三、繩文式文化の終末

第三章 日本文化の發展

一、金屬農耕の流入

二、彌生式文化の生活

第四章 原始國家の成立

一、日本原始國家成立前後のアジアの文化

二、日本原始國家の成立

結論

と四章と序、結論よりなり、日本文化の起源から國家の成立までを、この小冊子に興味深く、そして要領よくまとめられた點、敬服するところであるが、繁忙な著者が短時日にまとめられたものであるためか、その前半の章にはかなりの誤謬が指適されることは、この好著に甚だ残念な點である。著者がなお多くの時間と余裕を持たれ、周到な準備のもとに執筆されたならば、近來になり快著になつたであらうと惜しまれる次第である。

序において、戦後十年の日本考古學研究の進捗狀況は過云半世

紀のそれにも匹敵するかの觀を呈すると記されているが、この點については筆者も同感であり、多くの研究者に異論なきところと考ふる。

また登呂遺跡の調査が各姉妹科學の學者の協力を得て、考古學者も日本各地から參加して、各専門學者の意欲的な共同調査が完全になされた點を強調され、また新發見の無土器文化について、今日ではすでにそれを疑う者はない程度に否定すべからざる事實となつたと記されている。

第一章、一、人類文化の起源と日本國土の成立では、世界の人類の起源問題から論を進められ、『單なる推定としておそらくそれは凡て二百萬年位の前第三紀の終り頃、人猿共祖の哺乳動物から突然變異によつて人類として出現したと推定せられる』と記され、また『現在のところ世界最古のピテカントロプス・エレクタスと呼ばれる直立猿人化石は第四紀洪積期最新世下部層の出土で、人類として發生期より相當の時を經過しているが、しかしこの人類は加工した器具を所持していない。』と記され、ついで『この石器と確認できるものは、ピテカントロプスに次ぐ最古の人類として、地質年代の第四紀洪積期最新世上部層の化石と考えられている。シナントロプス・ペキネンシスにおいて、初めて認めることができる。——中略——この年代については種々の説があるが、かりに凡そ二〇萬年前とする説を採用すると、人類の發生が

約二百萬年前と考えられるから、今後に新しい發見のないかぎり、人類は約百八十萬年間は自然人であつたことになる。』と記されている。

先づ氏が洪積期最新世下部層なる語句を使われているのは、不用意に軽い氣持から筆をすゝめられてしまつたものと思うが、洪積期又は洪積世と最新世は同じ意味であり、下部洪積世で意味は充分納得できるものである。最新世の語句を、洪積世の細分と考へ違いをされたためであろうか。

ピテカントロプスの遺骨の出土した地層の年代については地質學者の間にも種々論議されたところではあるが、今日の研究では略下部洪積世末ぐらいに考えられており、シナントロプスと同時に代と見られている。氏はこれを伴出文化遺物の有無によつて、かなり時間的に離れた時代のもののように思われ、シナントロプスを上部洪積世のものと記された點は大きな誤りであり、シナントロプスも中國の斐文中氏などは、ピテカントロプスと共に下部洪積世中葉のものと考えられ、新しく考ふる學者もピテカントロプスと共に下部洪積世末ぐらいに考えており、シナントロプスを上部洪積世の人類化石と考えた學者は他に一人もないと思われる。恐らく氏の第四紀洪積期最新世上部層は地史の用語で正しく記せば第四紀最新世下部洪積層上部層出土の化石と云う意味で記されたものと想像される。

ピテカントロプスの化石人骨は一八九〇年中部ジャバのトリニールのソロ川の沿岸の段丘上で、デュボアによつて最初に下顎が発見され、翌年九月には西方四〇米離れた地點から第三臼齒を発見、一〇月に三米ほど離れた同一地層から頭蓋骨を発見、ついで翌一九九二年に頭蓋骨から一〇米離れた地點で大腿骨を発見、デユボアはこれらをすべて同一個體と考えて發表したのであつたが、各々異なるものであるとの説もあり、シナントロプスの如く住居した場所から出土したものでどうかは疑しく、ピテカントロプスが石器、骨角器などの器具を持たなかつたと斷定を下すのは早計であり、猿人と原人の名稱の相違から兩者の時代を引き離すのもおかしなことである。

またシナントロプスやピテカントロプスのことを記された新著に、桂林附近發見のキガントロプスや、ジャワのソロ村近くで發見のメガントロプス。ピテカントロプス・ロプスツスなどの新發見猿人群についての記載が全くないことは一寸寂しい感がする。

また一頁で、『もつともわが國においてもこのような氣温變化はあつたが、さほどの影響をおよぼすまでには至らなかつた。

—中略— として洪積期の終りから沖積期の初めにかけて、一層温暖となつたことは、當時地層から印度象の化石が発見されることや、ハイガイ等の暖系の貝類が出土することと、千葉縣の沼には珊瑚礁の化石が残つていることなどによつて明らかであろう。』

と記されているが、現今洪積世末乃至は沖積世初頭の地層から印度象の化石が出土すると云うことを考ふる地質學者は殆どなく、過去に東京都区内で發見された印度象の骨格は後世の混入物であると信じられている。この點樋口氏が最近の地質學關係書に目を通されなかつたためかと考ふる。またハイガイについても多くの考古學研究家の間には誤解されている。ハイガイは暖系の貝類であり、亞熱帶産のものではなく、従つて現在日本近海に棲息する暖系の貝類の棲息する範圍の水温の地域であれば、各所に棲息してもよいものである。何故棲息してもよい東京附近などに現在棲息しないのだろうか、水温など氣候環境は棲息を許しても、ハイガイは泥深い干潟でないといふと棲息し得ない貝類である。従つて日本の海岸には棲息する適地は殆どないのである。砂地、砂泥性などの海底面では生育し得ないのである。繩文文化早期末から前期初頭の貝塚にハイガイの多いのは沖積低地へ海浸が行われた頭初のことであり、泥海性の干潟が發達したためであり、繩文文化後期の時代の貝塚にハイガイの少いのは、海退期に入り、海岸が泥底から砂泥底に變つたため、砂泥底の干潟に繁殖するハマグリ、アサリなどがこれに代つたのである。

しかし繩文文化早期の貝塚出土ハイガイの殻が厚く發育良好な點、沼の珊瑚化石などより考ふる、沖積世初頭の頃は現世より海水温は若干高温で、海岸地域がその恩恵に浴し若干暖であつたであ

るうことは想像されるところである。

二、日本における舊石器問題と無土器文化、ここで長谷部言人博士命名、直良信夫氏発見のニッポナントロプス、アカシエンシスについて記され、『直良氏により発見された人骨の化石は、當時學界の承認を得なかつたが戦後長谷部言人博士がこれに注目し、明石人即ちニッポナントロプス・アカシエンシスなる名稱を與え、舊石器時代の人骨なることを承認、發表した。しかしその類例の発見がないこと等から、不幸、今日なお明石人は疑問のまま殘され否定的な學者の方が多い。―中略― 栃木縣葛生町河原洞窟にも未成熟の化石人骨と加工骨片を発見し、我國における舊石器時代人の生存を可能性の上からと、實際の考古學的方法と自然科學的智識とを驅使して究明しつつある。この方は伴出生物の研究や地質の上から一般には明石人以上の確實性を以つて迎えられる』と結んでいるが、直良氏発見の明石原人の腰骨化石は、発見當時も一部の専門家には重視されたのである。長谷部博士がニッポナントロプス・アカシエンシスと命名され注目された動機も實は東京大學人類學教室にあつた故松村瞭博士の原稿を見られてからのことである。

松村博士は直良氏よりこの腰骨化石を見せられた時、ピテカントロプス、シナントロプスにも比すべき大発見と思われた如くで、早速石膏模型を二個つくられ、詳細な研究結果を原稿にま

められ、直良氏の遺跡地の報文と共に、人類學雜誌上に報告される計畫であつたらしい。しかし當時は猿人の腰骨などの発見は殆どなく、主に頭蓋、下顎などの発見研究がなされており、一部の考古學者は人類學的な方面はわからぬまま、新しい時代の骨格の混入ではないかとの疑をさしはさむものもあり、當時としては疑問の點も多く、なお慎重に研究をした後、發表すべきであると、早急の發表を控えるよう忠告された權威者もあつて、松村博士の原稿はそのまま博士の机の中に収められてしまつた。戦後この原稿を長谷部博士が松村博士の遺品を整理中発見され、一讀されこの意外に驚かれ、須田助教授に石膏模型の收納場所をたずねられ、化石人骨の現物は直良氏宅にて戦災で焼失したため、松村博士のとられた實大石膏模型二個と、松村博士の研究結果を參考とされて、命名されたのであつた。そして最近では類猿人、猿人などの腰骨化石もかなり発見されており、化石人骨研究の權威者である長谷部博士、清野謙次博士などが、ピテカントロプスなどに對比される化石人骨であると云われているので、ほぼ間違いないものと思われる。これに對し葛生発見の未成熟化石人類の右上膊骨、下顎骨片、大腿骨など各々異つた地點より発見されたものは、長谷部、清野兩博士とも化石人類の骨格とは認められず、右上膊骨、下顎骨は他の哺乳類の骨格ではないかとの疑あり、大腿骨は現世人類のものであると判定されたのである。

次に芹澤長介氏の駿臺史學第四號に發表の論文を讀まれて、我國の無土器文化について解説されている。

三、最早期繩文式文化 では繩文文化早期前半の日本について解説を試みられようとしている。この文中で横須賀市夏島貝塚、平坂貝塚などの最下層から撚糸文土器が出土すると記され、さらに『すべて尖底の深鉢で大多數が撚糸文を施した稻荷臺式土器は、繩文式土器の最初の姿を示すものであり、繩文式文化起源の問題を解決する上の重要な位置を占めており、これが關東地方を中心として以西の、愛知、岡山、廣島、香川、熊本などの諸縣にわたる廣汎な分布を示しているのである。

ところが、これら撚糸文土器には、押型文土器を伴うことが多い。―中略―東京都井草新町出土の井草式土器、東京都拜島町出土の拜島式土器などは、押型文土器の代表的なものであり、稻荷臺式、井草式、拜島式は、それぞれ多少とも系統を異にするが、いづれも共通の文化性格をもつて東北、中部、近畿、中國、四國、九州と廣く分布し、稻荷臺系文化あるいは押型文系文化とも總稱されるのである。このように今日まで知られた繩文式文化の最早期を示す土器は、繩文の使用が顯著ではなく、撚糸文を中心とする稻荷臺式だと言うことになる。そしてこの期の文化層は、關東各地では黒土の最下低、ローム層上面、あるいはローム層中に包含されているから、當時の人々はまだロームの上に沖積土が

堆積しない前にその臺地上に居住したことになり、稻荷臺式をもつて代表される最早期繩文式文化は沖積世の始めに近い頃に遺されたものであることが、考えられるのである。』と記され、また『東南アジア、特に佛印地方にも、ソムロンセン貝塚を代表とするような、繩文を押しした土器を出す貝塚があり、この方面との比較も考察しなければならぬ。』と記されているが、本稿は大變矛盾したものである。

芹澤長介氏の『關東及中部地方に於ける無土器文化の終末と繩文文化の發生とに關する予察』（駿臺史學4號）を熟讀されていないのではなからうか、明大考古學研究室の夏島貝塚平坂貝塚、太丸遺跡などの發掘調査によつて、稻荷臺―拜島―井草の編年的推移の過程に疑が持たれ、土器全面に縦位に施文された繩文のある井草式土器が最も古く、ついで拜島遺跡出土の土器片にも見られる夏島貝塚の下部貝層出土の、縦位に施文された繩文ある土器と、撚糸の縦方向、或は斜位に施文された夏島式土器とも呼ばれる形式へと推移し、最後に稻荷臺式が現れるのではないかとこの今日までの推定とは全く異つた結果が考えられるに至つた。これは大丸遺跡の層位的發掘調査による結果から歸納されたものであるが、私はこの遺跡が急斜面の一部にあり、後世斜面上部の包含層が下に落ち逆轉する場合も考えられないことはないので、一應この新見解に對し留保の立場をとつたのであつたが、昭和二十九年

末千葉縣西之城貝塚を發掘調査するに至つて、この事實が正しいことを理解した。

即ち原始的な作品から精巧な作品へと進展すると云う通念から、層位的事實の判明しなかつた時代に白崎高保氏や私などが想定した稻荷臺―拜島―井草の編年が誤つていたものであることは、大丸遺跡と西之城貝塚の發掘調査による層位的出土事實によつて確認された次第である。つまりいづれかから渡來した最初の土器文化は彼の地の優れた土器製作技術がそのまま繼承されるが、この土器文化が無土器文化の人々に受け入れられ、關東各地で土器がつくられるようになり、最初に無土器文化の人々によつて發展した文化は、最初に渡來したものより見劣りのするものであることが一應考えられることである。

従つて最古の土器文化は今日では井草式土器であることが確認され、この井草式土器は南關東地方の一部にのみ分布するものであることもわかつてきた。そしてこの最古の土器に施文された文様は、砲彈形尖底深鉢の口縁に平行に横位か、或は口縁と直角に縦位に垂直に條の走る繩文が器面のほとんど全面に見られ、従つて繩文の使用が顯著でないの語句は當を得ていない。尙、稻荷臺式土器でも撚糸文のみでなく、縦位の繩文の施文されたものがあるにみられるところで、繩文はこの時期のこの系統の文化の特徴ともみることができよう。

また繩文、撚糸文が施文された尖底土器が愛知、岡山、廣島、香川、熊本などの諸縣にわたつて廣汎な分布を示していると記されたことも大きな誤りである。

長野縣下り林、愛知縣行人原、岡山縣黃島、廣島縣宮脇、香川縣小蔦島、大分縣速水臺、熊本縣沈目などの諸遺跡で押捺文土器（押型文土器）に伴出して僅かな外ら撚糸文、繩文の施文された土器片が出土し、施文法が施文原體を土器面に廻轉押捺して施文する同一施文法であり、押捺文土器と撚糸文、繩文の施文された井草式、稻荷臺式などとは密接な關係あるように考へ、私などがこれ等を合して稻荷臺系文化、或は廻轉押捺文系文化として、一括して一系統のものと考えて發表したことがあつたため、このような誤りを生ぜしめるに至つたものと考えられる。

その後研究が進捗するに従つて井草式、稻荷臺式などと押捺文土器が全く無關係のものとは思われないが、伴出石器の相違などからして別系統のものであると考えられるようになってきている。

愛知、岡山、廣島、香川、熊本などは押捺文土器の文化圏であり、撚糸文の施文された土器は押捺文土器の古形式の土器を出土する遺跡で、出土全土器片の一割にも満たない僅かな數、見出される程度であり、前記の語句は私の過去の考え方に影響された誤解であると考へる。

また撚糸文土器が押型文土器を伴うことが多い。と記されたことも、私の過去の發表に影響されるところが大きいのではなからうか、稻荷臺遺跡では山型押捺文の施文された小土器片が數片採集され、東京都世田ヶ谷區船橋町の稻荷臺式土器出土遺跡や、同區赤堤町新井の同式土器出土遺跡、拜島遺跡などでも附近から各一片の山型押捺文の施文された小土器片が表面採集されたので、當時は僅かに山型押捺文土器を伴存するものと考えたのであつたが、南關東地方で井草式、夏島式、稻荷臺式などの各形式の土器を出土する遺跡の發掘調査例が増加するに従つて、井草式、夏島式には押捺文土器は全く伴存せぬことが確認され、稻荷臺式にも恐らく伴存せず、稻荷臺式より一形式乃至二形式下降した時代に山型押捺文が現れるのではないかとも見られ、若し稻荷臺式に見られるとしても、その末期の頃と考えられ、押型文土器を伴うことが多いと記されたことは誤りである。

また井草式土器や拜島式土器などは押型文土器の代表的なものでありと記されたのは、筆をうつかりすべらした誤りであろう。撚糸や縄文も施文原體の廻轉押捺による壓痕文ではあるが、一般には細い丸棒に彫刻した施文原體を廻轉押捺して施文した、細い丸棒の沈刻文の壓痕文のみを押型文土器と呼んでいる。

また稻荷臺式、井草式、拜島式(夏島式)は東北、中部、近畿、中國、四國、九州と廣く分布し、稻荷臺系文化あるいは押型文系

文化とも總稱されるのである。と記されているが、これも前記した私の過去の發表に影響された誤りである。井草式、夏島式、稻荷臺式は現在のところ東京灣周邊の海岸地域の南關東地方から太平洋岸を茨城縣附近にまで北上した範圍で、水戸附近の夏島式には若干地域差が認められるようでもある。

中部地方以西、關東地方の群馬縣などは押捺土器の文化圏で、山型押捺文を主とする格子目押捺文をこれに伴存するような押捺文遺跡で、縄文、撚糸文の施文された土器を僅か伴出する程度である。

奥羽地方へは縄文の施文された尖底土器が早期の中頃、青森縣下まで到達するが、これが井草系の文化であるかどうかは今後の研究を俟たねばならぬ。

また本書には全く記されていないが、北海道南部から奥羽地方、關東地方に互つて、押型文土器、井草式土器などは伴出石器も全く異つた、伴出石器、土器の施文法など北ユーラシアの櫛目土器文化の古いものに類似點の多い田戸住吉町系文化があり、西九州には朝鮮半島の古い文化と關係深い會畑式の尖底土器がある。

また當時の人々はまだロームの上に沖積土が堆積しない前にその臺地上に居住したことになり、と記したのは私の古代文化十三卷八號の赤堤町新井遺跡調査報告の記事を誤讀されたのではない



だろうか。私はローム層臺地にまだ沖積土層がいくらかも堆積を見ない頃、臺上に住居を營んだため、一部の遺物はローム層面を數層喰込んで埋没するような状態で發見されるものあり、この形式の土器片はローム層面の上下二十糎内外に最も多く發見されると記している。また大丸遺跡の如く斜面で沖積土の厚い部分では、ローム面からは土器片は出土しない、半島狀の臺端などにある場合、沖積土の堆積が少いため、ローム層内に喰込むのである。

カンボジアのソムロンセン貝塚から縄文を施文した土器と記しているが、この貝塚の最下層からは或は撚糸文の施文したものが出土するかもしれないが、ソムロンセン貝塚は同地方の新石器時代末から金石併用時代に互る代表的大貝塚であり、青銅器も出土しており、わが國の井草式との關係を考ふるような古い時代のものではない。恐らく北部ヴェトナムのバクソン、ホアビンなどの洞窟遺跡發見の同地方で原新石器時代と呼んでいる、バクソニア文化の石器、土器との類似性を指適するつもりで、誤つてソムロンセン貝塚と記してしまつたものと考えらる。

第二章、日本の石器時代文化の中で、縄文文化中期の住居址について、『方形平面の住居もこの頃には圓形平面の圓錐形家屋となり、我國の風力、雪壓、雨量に對する最も耐久力を持つものが完成している等はその一例である。』と記されているが、縄文文化後期の後半でまた方形に戻るのは何故であろうか、また最近畿

内方面發見の縄文文化中期の竪穴住居址は方形である。このような點が如何なる理由によるものか解決されぬ限り以上の説は納得し得ぬものである。

第二章 一、縄文式文化の發展では、纖維土器が中部や近畿地方の一部にまで分布していると記されているが、最近の調査では山陰の島根縣鵜灘貝塚出土の貝殻條痕文土器、同縣菱根遺跡出土土器などの一部にも纖維を含有するものがあることがわかつた。

また『縄文式文化も終末を告げる晩期になると、その分布が本州の中央部から東北に限るようになり』と記されているが、これは古い學者の常識で、最近の縄文文化研究者の間にこのような考えを持つものは一人もない。

大洞B式 BC式などの龜ヶ岡系の文化は畿内以西には波及していない。即ち晩期の縄文文化には二つの大きな文化圏があり、龜ヶ岡系の文化が畿内まで分布するのに對し、條痕文を主とした晩期の文化が九州より中部地方の西半に文化圏を持ち、相對立した二つの文化圏があることを忘れてはならない。

彌生式文化は條痕文系の晩期縄文文化の榮えた北九州地方に發生して東進したのである。

三〇頁で『近畿地方で縄文式中期文化の行われた頃より、おそらく北九州からはじまつたと思われる大陸文化の影響による彌生式土器化が、金屬や稻作農耕とともに新興の文化として、次第に

内海を通過して近畿地方に流入し、—中略—そのため縄文式文化の古い傳統を持ちつづけるものは逐次東日本へと後退したかの如き觀を呈した。』と記されているが、このような論據が何から擲み得たか判断に苦しむところである。縄文文化中期には九州では阿高式文化が榮えた時代で、まだ彌生式文化の母胎になる新文化の傳來などは考えられぬ時代である。炭素の放射能よりする計算では中期末が約四千五百年前である。このことは本書の著書も理解されているはずである。

古い傳統を持つたものが東日本へ後退したなどと云う如きも考えられない、これらのことは、また稿を別にして詳論したいと考える。

また『また在來の縄文式文化が新らしく起つてきた彌生式文化の過程において東日本へと近よるにしたがい、彌生式土器に縄文をもちはじめた。これは濃美平野以東が久しく濃密な縄文式文化に屬していたための、一つの現象、即ち古い傳統を形の一部に残しながら新しい文化の内容にとつて替ろうとする時の姿と理解することができると思う。』と記されているが、これは卓見のようで、大きな見落しをしたための誤りである。前記した如く晩期の縄文文化には二つの文化圏があり、西日本の晩期の土器は縄文の施文されないもので、これは西日本の前期彌生土器の中に生きている。中部地方以東に濃密な分布圏を持つ、縄文を施文した龜ヶ

岡系文化の人々の中へ新しい彌生式文化が入つてくれば縄文の施文された彌生土器が生れるのは當然である。

日本古代史を専攻した純粹の先史考古學者でない研究者の間では今日でも彌生式文化、金屬文化の東進はかなりの時間を要したように考え、北九州と奥羽南部とでは千年に近い時間的差異を考える人もあるようであるが、實際には數百年のひらきもないものと思われる。これについてはまた別稿をもつて論ずる。

二、縄文式文化の生活、の中で『凹石といわれる石器の凹所が發火用のものであるとされるが、石は熱の良導體であるから實際において火は起らない』と記されているが、これは著者が凹石を發火器として使う場合、火切杵の重しとして、杵の上部のおさえに使うと云うことを知らないためであろう。

また『粘土の紐を巻き上げて形をつくる卷上法が使用されている』と記されているが、これは八幡一郎氏の『日本史の黎明』などにも記され一般には縄文土器には輪積法と捲上法があるように思われているが、今日まで私が各方面の資料を詳細に調査した中には捲上法により成形されたと思われるものは一個も見られなかった。

また家畜について、『僅かの牛、馬、豚と多くの犬があるが』と記されているが、貝塚などで數例發見された、牛、馬は家畜かどうか疑問であり、野性のものとする考える學者もいる、ま壺岐カラ

カミ山貝塚などの北九州の島嶼の彌生式貝塚から支那豚の骨格が出土しているが、縄文式貝塚から豚の骨の發見例は聞いていない。このほか問題になるものに猫がある。

次に交通路のことで、『この時代の交通に關しては、早期は水上交通であり、前期には多少陸路も利用されたらしく、中期に至つては陸上交通が大いに利用され、後期では水陸兩路が随意に用いられたと想われるが、これとても一般的な解釋であつて、海岸から離れた山間部の大分縣城原村、岐阜縣大名田町ひぢ山、一中略―諏訪湖底ソネなどから早期押型文土器と總稱される土器が發見されている事實は陸上交通が早くから開けていた事を物語っている。そしてその交通路は尾根沿いでなくむしろ相互に小河川、谷川などに沿つて設けられたものであることは諸遺跡の立地から類推できる。』と記しているが、これも驚くべき異説である。著者は藤森榮一氏の『かもしかみち』を讀まれたであろうか、縄文早期の井草式や田戸住吉町式文化の人々が航海術に長じた人々であつたことは、その伴出漁具、魚骨などで判斷できるところであるが、早期には余り陸上交通をしなかつたと考へるのはおかしいことである。無土器文化以來山間部の臺上に人が住み生活をしていたのであり、押捺文土器出土遺跡は乘鞍岳の鈴蘭小屋附近をはじめ、中部地方の山岳地帯の千米前後の標高の場所に夥しい數が知られている。私は最近廣島、兵庫の山岳地帯の押捺文土器遺

跡を踏査した、また奥羽地方では貝殻腹縁の壓痕文の施文された田戸住吉町系の尖底土器が山形、福島方面の山地から發見されている。聚落は野獸、外敵に對する防禦から三方に見透しのきく臺端のような場所が選定される。しかし高原の尾根の湧泉のあるところにはかならず縄文土器片が認められ、交通路は樹木の少い尾根道が好適であつたことを物語っている。

斷崖、絶壁で崖くづれの心配もあり、倒底登り得ぬ斷崖もあり、谷川には淵があり、周圍は密林で進めぬと云う場所もあり、平野地帯では砂利の河原を歩くことはあつても、山岳地方の交通路は尾根沿いの道であつたことは藤森氏の説かれる如くであつたと思われる。

また刳舟の材は樟、杉が多いと記しているが、今日まで慶大の松本信廣教授と協力して資源科學研究所の山内文氏が研究されたところでは、カヤが一番多くクス、スギ、マツなどがこれにつぐようである。

三、縄文式文化の終末 のところで青龍刀形石器を末期のものとされているが、これは奥羽地方北部、北海道渡島半島南部の後期の土器に伴存するものであるらしい。

なおまだこまかい點については指適したい點も多々あるが、余り長くなるので論評はこの程度に止めておく、ただここに不思議な點は第一章、第二章にこのように誤謬の多

いのに反し、第三章、第四章には大過なく、一、二、筆者と意見を異にする程度であり、前篇と後篇では著者が異なるように思われる。

卷末に著者が本書執筆には學友金谷克己、下津谷達夫の兩君の非常な助力を得たと銘記されているが、私の想像では著者が明解な執筆方針をたてられ、題目をきめられ、愛弟子の兩君が執筆したものと解され、著者が充分に校訂する余裕もなく出版される運びとなつたものと思われる。私の指適した誤りの中には著者の該博な識見を持つてしてはこのような誤りは倒底犯すことのないと思われるもの數ヶ所あり、若いお弟子の執筆によるものであることが想像される。

種々御繁忙中の著者が充分校訂をなされ得なかつたことが本書の一大缺點であり、實に遺憾なところであるが、著者がこのような小冊子に要領よくわが古代文化の要點を興味深く把握できるような執筆方針を組まれた點には敬服するものである。本論評と併せて一讀をお奨めする。

(江坂輝彌)